
プレヴィッツ＝メリノ

アメリカ会計史

—会計の文化的意義に関する史的解釈—

大野 功一 岡村 勝義 訳
新谷 典彦 中瀬 忠和

A HISTORY OF
ACCOUNTING IN AMERICA
BY
GARY J. PREVITS
BARBARA D. MERINO

同文館

〈訳者紹介〉 (50音順)

大野 功一 (おおの こういち)

1947年 新潟県にて生まれる。
1978年 中央大学大学院博士課程退学 (所定単位取得)
現 職 関東学院大学経済学部助教授
主要論文 「取得原価主義の二つの論理」(『関東学院大学三十周年記念論文集』 1979年) ほか

岡村 勝義 (おかむら かつよし)

1949年 新潟県にて生まれる。
1977年 中央大学大学院博士課程退学 (所定単位取得)
現 職 神奈川大学短期大学部助教授
主要論文 「課税所得計算における実現概念」(『神奈川大学経済貿易研究所年報』第7号 1979年3月) ほか

新谷 典彦 (しんや のりひこ)

1947年 北海道にて生まれる。
1976年 中央大学大学院博士課程退学 (所定単位取得)
現 職 函館大学商学部助教授
主要論文 「W. J. ヴァッターの資金理論」(『函大商学論究』第13輯 1978年3月) ほか

中瀬 忠和 (なかせ ただかず)

1942年 愛知県にて生まれる。
1972年 中央大学大学院博士課程退学 (所定単位取得)
現 職 中央大学商学部助教授
主要論文 「会計の『機能』と『機能システム』としての管理会計」(『中央大学企業研究所年報』第2号 1981年8月) ほか

《検印省略》

昭和58年2月18日 初版発行

略称—プレヴィッツ

プレヴィッツ=メリノ
アメリカ会計史

定価 円 6,800

訳者	◎	大岡新中	野村谷瀬	功勝典忠	一義彦和
発行者		中	島	朝	彦

発行所 同文館出版株式会社

東京都千代田区神田神保町 1-41 〒101

電話(東京)294-1801~6 振替東京0-42935

Printed in Japan 1983

整版：海外印刷

印刷：K M S

製本：K M S

ISBN 4-495-14991-1

推薦の辞

アメリカでは、周知のように、1960年代のはじめに、「会計理論のレヴォリューション」という言葉が一部の人によって用いられ（例えば、G. Edward Philips, “The Revolution in Accounting Theory,” *Accounting Review* (October 1963), pp. 696—708.），また70年代の後期には、当時の会計理論の動向に関連して、そのことが「会計思想におけるレヴォリューションか」という問題提起が Wells によって行われた（M. C. Wells, “A Revolution in Accounting Thought?” *Accounting Review* (July 1976), pp. 47—82.）。彼の主張がその後刊行された American Accounting Association, Committee on Concepts and Standards for External Financial Reports, *Statement on Accounting Theory and Theory Acceptance* (Sarasota, Florida: American Accounting Association, 1977.)（染谷恭次郎訳『アメリカ会計学会 会計理論及び理論承認』昭55 国元書房）とおなじく、Kuhn の科学的レヴォリューション論に基づいて展開されたこともあって、Kuhn の科学論の会計学を含む社会科学への適用の妥当性が会計理論および会計実務（以下、これら二つのものを「会計」と総称する。）のレヴォリューションとの関連において、一部の人によって論ぜられ、1981年には、ついに *Accounting Revolution* という副題をつけた本が Beaver によって出版された（William H. Beaver, *Financial Reporting: An Accounting Revolution* (Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall, Inc., 1981.))。

例えば、American Accounting Association, Committee to Prepare a Statement of Basic Accounting Theory, *A statement of Basic Accounting Theory* (Evanston, Ill.: American Accounting Association, 1966.)（飯野利夫訳『アメリカ会計学会 基礎的会計理論』昭44 国元書房）に見られるような1960年代におけるそれまでとはちがった新しい動向を、revolution とよぶか、それとも evolution とよぶかは措くとしても、その時期にアメリカの会計に

(2)

は、何らかの変化があったということについては、おそらく何びとも否定することはできないであろう。会計が変化するのは、会計がそれ自体のなかに矛盾をはらむことにもよるが、否、寧ろ、それ以上に、会計をとりまく環境の変化によることが多い。一般に社会的現象とよばれるもののすべてがそうであるように、会計もまた、内なるものと外なるものとの相互作用によって変化し発展して今日に至っている。Previts と Merino の共著になるこの本は、実はこのような視点から、102人の清教徒が Mayflower 号にのって Cape Cod の海岸にたどりついた1620年から1978年までのアメリカの会計の歴史について、かきつづったものである。

これは、これまで特にこの分野の比較的初期の著作に見られたような単に会計に関係のある出来事や簿記会計書を羅列したものではない。アメリカの社会、経済および政治が会計、職業会計人および会計学界人にどのような影響を与え、またそのこととは反対に、それら会計等がアメリカ的生活様式、政治等にどのように影響したかという視点からかかれたものである。したがって、本書はアメリカにおける会計の歴史に関する本であるとともに、会計史研究者の筆になるアメリカの社会、経済および政治に関する本でもある。しかもそれは、会計に関する実務ならびに法規および規制、職業会計人の活動とその組織、実務界および学会をふくむ会計界の人々、簿記会計書、会計教育など、会計に関するあらゆる領域を網羅している。しかもそれらのことはすべて、他人の手によって加工されていない数多くの生の第一次資料にもとづいてつづられていることは、800にもおよぶおびただしい数の文献が巻末に収録されていることとともに、特記されるべき事柄である。本書がこの分野での「最高の著作」(a premie work) と評せられるのも、けだし当然のことであろう (Richard A. Scott, Book Review, *Business History Review* (Autumn 1980), pp. 406—407.)。

しかしいうまでもないことではあるが、原著が名著であることは、必ずしも、その訳書が名訳であることを意味しない。原著と訳書とは、一応、別のものだからである。翻訳ということは、元来、大へん至難な作業である。この場合についていえば、英語がいかに堪能であっても、日本語が十分でなければならず、二つの言葉が十分であるとしても、会計のみならず、アメリカにおける

社会、経済および政治についての知識がなくてはならない。日本語、外国語、そして専門とその周辺のことについてのふかい学識とひろい経験、少くともこの三つのものがそろわなくては、本当にその名に値する翻訳ということはできない。それが一人の手になるのではなくて、本書のように、数人の共同作業となれば、さらに多くの困難がともなう。訳語、文体等の統一が必要になるからである。

私は、今度この至難な作業に挑まれた若い研究者の人々とは、かつて教室において、黒板を前にしたか後にしたかというちがいはあるが、お互いに教え、教えられる関係にあった間柄であり、そして「共に学ぶ」という関係は今日までもつづいている。そしてこれらの人々はすべて、上にのべた翻訳に必要な諸条件を、十分であるか否かはおくとして、必要な程度に備えておられることは信じて疑わない。そして、最終原稿ができ上がるまでには、下訳を相互に交換しあい、折を見ては、幾度か泊り込みで、文字どおり、夜を徹して、よりよきものにするというたゆまない努力をされたことも知っている。したがって、一応の分担はあったといえ、それは第一次翻訳の責任を示すにすぎず、出版されたものについての責任はお互いがひとしく分担しあうという、正に「共訳」にふさわしいものになっている。しかも分担者のうちのある人は、直接、原資料にあたって調べるために、1981年の夏、わざわざ、ニューヨークのアメリカ公認会計士協会の図書館を訪れるという周到な態度でこの作業に当られたことを特に記しておきたい。名著は正に名訳者を得たといいうるのであろう。

さきにのべたように、この本の取り扱いところは、きわめてひろく、そしてその水準はきわめて高い。したがって、これは、アメリカにおける会計実務の歴史に関心をもつ人はもとより、アメリカにおける会計学説の発展や会計教育の推移、さらには職業会計人がいかにして今日の確固たる社会的地位をしめるにいたったか、その苦闘と苦難の足どりを知ろうとする人にとっても、きわめて貴重な文献といえるであろう。そして幸いにも、翻訳に適切な人々を得た。会計史および会計学説史の研究者にはもとより、さらにひろく、会計学の研究および会計の教育にたずさわる人々ならびに職業会計人の方々にも、本書を一読されることをおすすめする所以もまたここにある。

(4)

私はいまこれをイリノイ大学の国際会計センターのオフィスでかいている。所長の Zimmerman が College of Commerce and Business Administration の Dean でもあるので、主として Dean のオフィスを使っていることもあって、私は所長室をオフィスとすることを許されている。Zimmerman は、周知のように、Littleton の指導をうけて、このくにでは比較的はやく会計史の研究をはじめた人。オフィスの書棚には、当然のことながら、A. C. Littleton, *Accounting Evolution to 1900* と A. C. Littleton and V. K. Zimmerman, *Accounting Theory: Continuity and Change* が目のつく、取り出しやすいところにおいてある。このようなところで、アメリカにおける会計史に関する著書に関連して、この一文を草することになったことについて、偶然以上の何かをひしひしと感じている。

スタジアムの方から聞こえて来た歓声もやんだ。フットボールの試合はおわったようである。そして Illini March をかなでながら、バンドがかえってくる。イリノイ大学が勝ったようである。翻訳の作業に当られた若い人々の研究もかくあることを期待しつつ。

1981年10月

飯 野 利 夫

序 文

会計は文明の一つの表現であり、会計の歴史を支配する法則は人類の進歩を支配する法則でもある。

[Arthur H. Wolf, *A Short History of Accountants and Accountancy*, London, 1912]

本書は、公共会計士、財務担当管理者、公務員、会計学の教員など会計専門家に捧げるために執筆された。これは歴史書である。すべての歴史書がそうであるように、本書も、時の経過と新しい資料の発見に伴い、絶えず修正されるにちがいない。したがって、本書は、文字通り未完成であるし、また、学問的にも通俗的にも興味を呼ぶと思われる人物や制度や出来事を任意に選んで取り扱っているにすぎない。

各章では、ピューリタンの時代から現代までの重要な時期における社会的、政治的、経済的および人的要素を考察している。そのような概説を目的としたので、どれか一つの要素について深く掘り下げた分析はなされていない。しかし、それら要素の進歩を促進した気風、逸話、友情、論争が描述されている。我々は、アメリカ会計学が様々な影響をうけて複雑に織りなされて発達してきた独特の学問であり、最近の国会審議で取り沙汰された会計の制度化がアメリカ的生活様式いわば**新世界の秩序**において益々重要な役割を演じる、という命題を検討したのである。

本書は、現存する多くの資料を総合して、会計実務をアメリカ文化の一環として捉えるという新しい見地を切り拓いたのである。その前半は記述的であるが、次第に、特に今世紀における会計を扱う箇所では、分析的となる。

新国家の形成期から現代まで、我々は創意に富んだ重要な会計文献を手引とした。19世紀初期の Bennett, Turner, Jones, Foster, Folsom, Packard などのアメリカ人の業績が、古典派以前の時代である世紀の転換期における

Charles E. Sprague, Henry Rand Hatfield, John R. Wildman, Roy B. Kester, Robert H. Montgomery などの労作の礎となっている。古典派時代は、1920年代末から30年代初めの大恐慌をめぐる処置によって知られるように、理論・実務の両面でアメリカ会計の成熟期を示している。当時のめざましい発展は、W. A. Paton, George O. May, Eric L. Kohler, A. C. Littleton, J. B. Canning, Stephen Gilman および DR Scott の貢献に負うものである。

第二次世界大戦後、国際的な企業や投資の拡大と持続的なインフレーションによって、会計の環境が「一つの世界」といえる地球的規模になったことがアメリカ会計の現世代を画している。

アメリカ社会では政治的・経済的統制の主要な手段として会計が利用されるであろう、という1931年のDR Scottの予言は、明らかに1970年代という現代文化の「転換期」において現実となっている、と思われる。

我々の仕事は途方もなく広範で野心的であることは承知している。当然多くの批判が寄せられることも予想している。それにもかかわらず、学問の向上にとってなんらかの積極的な意義があることを期して、関心の高まりを促すために、我々はこの危険を冒すことにした。

ご指導ご鞭撻を賜った Edward L. Lawson, 有益な助言を戴いた Felix Pomeranz, 本書の執筆中なにかとご配慮戴いた同僚や友人、そして特に家族に対して、感謝の意を表したい。

Gary John Previts

Barbara Dubis Merino

アラバマ州ユニヴァーシティ

ニューヨーク市

1979年4月

目 次

推薦の辞	(1)
序 文	(5)
略字一覧表	(11)

第 1 章 ピルグリムから独立戦争に至る時代の会計

(1492年—1775年) 3

新世界の秩序の思想と経済的環境	3
ピルグリムの資本—共同事業体	4
初期の会計教育	8
資本市場と初期の株式公開企業	9
会計実務と初期の公共会計士	10
商業資本主義	11
政府会計	14
独立戦争前における会計の文化的意義	16

第 2 章 国民経済の誕生 (1776年—1826年) 19

新国家の政治的および経済的要素	19
建国の父祖達と彼らの会計	20
商・工業の状況	22
資 本 市 場	24
新国家における会計士	26
勘 定 事 務 所	27
会 計 士 の 教 育	29
初期の教科書	29

(8)

会計の公共的な実務と開示	32
管 理 会 計	33
連邦主義者の政策	34
州政府および市政	36
新 国 家 の 会 計	37

第3章 農場から工場へ ——産業時代の幕開け—— (1827年—1865年)——45

南北戦争前のアメリカの政治経済	45
資本市場の素描	48
南北戦争前の教育者、著作者および刊行物	50
蒸気船と駄馬車	57
鉄道業の会計と報告	60
原価計算の統合：一つの契機	66
連邦政府および都市の会計	68
南北戦争前における会計の意義	69

第4章 現代への序幕 (1866年—1896年)——75

金箔時代の政治的および社会的環境	75
近代資本市場の誕生	80
会計報告書、財務公開および規制	85
公共会計実務の出現	96
会計教育と教科書	111
前古典派理論の誕生	115
原価および管理会計	121
州政府および自治体会計	128
「金箔時代」の会計の意義	131

第5章 会計専門業の形成 (1897年—1918年)——135

金融資本主義の台頭	136
-----------	-----

改革運動における会計士の役割	144
会計専門業組織の機構	146
アメリカ会計士協会 (A I A)	156
専門業の基準の進化	157
会計理論と監査理論	171
資 産 の 測 定	183
技術基準の形成	196

第 6 章 古典時代 —会計の成年期— (1919年—1936年)—————211

時 代 背 景	211
専門業の分裂— AIA と ASCPA	220
会計理論と会計実務	233
学究的理論家の貢献	236
株式会社時代の会計職能	243
会計実務の諸問題	247
不 況 時 代	254

第 7 章 拡大と論争 —不確実性の時代における会計士—

(1937年—1966年)—————267

連邦政府の規制に対する反応	272
専門業の組織化	274
会計基準の形成	279
学界の研究成果	293
会 計 教 育	300
過渡期の会計思考	306
会計実務—1960年代の挑戦	316
行政理論の影響	319

第8章 政治会計の時代 ―会計は独自性の危機に直面している―

(1967年―1978年)-----327

神秘的な専門業	327
社会的および政治的環境	328
資本市場	329
経営相談業務、古くて「新しい」専門	332
税務会計	333
管理会計と内部監査の認定	334
官庁会計および非営利会計と監査	334
一世界の会計：一般に認められた会計原則（GAAP）から国際的会計 原則（GAP）へ	336
専門業の自己変革：市場の解明	337
社会の期待と責任：規則と法律	339
学術的個人主義の黄金時代	348
会計の遺産と将来	353

参考文献-----	361
訳者あとがき-----	401
事項索引-----	405
人名・著書・論文および雑誌索引-----	412

略 字 一 覧 表

AAA	アメリカ会計学会
AAPA	アメリカ公共会計士協会
AAUIA	アメリカ大学教育者協会
AI A	アメリカ会計士協会
AICPA	アメリカ公認会計士協会
APB	会計原則審議会
ASCPA	アメリカ公認会計士会
CASB	原価会計基準審議会
CAP	会計手続委員会 (AIA)
CPA	公認会計士
FASB	財務会計基準審議会
FRB	連邦準備局
FTC	連邦通商委員会
GAAP	一般に認められた会計原則
IA	会計協会
ICC	州際商業委員会
NAA	全米会計士協会
NACPA	全米公認会計士会
NYSSCPA	ニューヨーク公認会計士協会
SEC	証券取引委員会

(訳者の作成による)

プレヴィッツ＝メリノ

アメリカ会計史

—会計の文化的意義に関する史的解釈—

1492 年—1775 年

第1章 ピルグリムから独立戦争に至る 時代の会計

人と人との間の俗事に関してどんな国民にも必要な事がある。正しく完全な計算はそのような重要事項の一つである、と考えられる。もしもそれが行われていないと、しかも当事者が勘定についての完全な知識に乏しいと、彼らのいずれもが正当性を表明しえないような物の帰属を法律に基づいて審理しようとする人々に、しばしば時間の多くを浪費させ疲弊をもたらし。そのようなことは、もしも計算に関する完全な秩序がすべての人々に熟知されておれば、十分避けられるであろう。

[James Peele, “practizer and teacher” of bookkeeping, London, 1553]

Aristair Cooke の識見豊かな話題作 “America” には、Columbus の航海に、彼の「経費勘定」を記帳するためスペイン君主によって任命された会計官が乗組員として加わっていた、という指摘がある。このような幸先のよい記述を起点に、我々の研究 “A History of Accounting in America” は出帆する。

新世界の秩序の思想と経済的環境

清教主義の倫理と 16 世紀の宗教改革は、せんじつめれば高利貸さえも非難されない経済制度を育んだ。そこでは、営利事業に携わることが望まれるばかりか社会的義務ともなり、「善良なるクリスチャンと経済人とは相似ること少なからず」といわれた (Tawney 1926: 210)。

現代の自由企業制度に継承された新世界の秩序の基礎を築いたピルグリムの開拓者は、自らの宗教教義を経済的利益の追求と軌を一にすると考えた。彼らの仕事は容易なものではなかった。彼らの新天地は荒涼とした原野であった。それにもかかわらず、共同事業を原則として彼らの生活は開始された。その共